

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMEs ニュースレター

VOL.23 2023

| | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 学びの寄港地 1 | 3. 新任スタッフ紹介 11 |
| (1) 中鉢 夏輝 1 | 木村 風雅 11 |
| (2) 内田 匠 4 | 4. 駒場中東セミナー開催報告 12 |
| 2. この一品——私の研究モノ語り 6 | 5. パフワーン文庫便り 15 |
| (1) 池邊 智基 6 | 6. センターの活動紹介 16 |
| (2) 末野 孝典 8 | 7. スタッフ・発行者情報 16 |

1. 学びの寄港地

現地に滞在することで新たに得られた「学び」をお届けする本コーナー。現地社会の価値観や感覚、留学先や旅先で出会った人々との交流、そして研究を通して得られた知見について、2名の執筆者にご寄稿頂きました。

(1) あなたはなぜ、環境を守るのか？

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
中鉢 夏輝

はじめに：グリーンなドバイとイスラーム

近年、環境問題や気候変動は世界共通の危機とされ、脱炭素やエコ・フレンドリーは避けられない潮流となっている。その傾向はアラブ首長国連邦 (UAE) でも例外ではなく、気候変動対策に向けた国際社会との連帯をアピールしている。同政府は 2021 年 10 月、2050 年までの温室効果ガス排出量ネットゼロを目指す達成目標を、中東地域で初めて

提示しており、2023 年 11 月から始まる国連気候変動枠組み条約第 28 回締約国会議 (COP28) のホスト国にもなっている。SDGs 達成の旗印のもと、植林や再生エネルギー導入などに取り組む企業も少なくない。

2023 年 2 月のある日、筆者はドバイの市街地を歩いていた。筆者の意識は常に、何らかの環境問題に自然と向いていた。街中には、中央分離帯に沿って立つ、動物の写真とともに生物多様性保全を訴える掲示板の列、「リサイクル・ボックス」と大きく書かれたゴミ箱、プラスチックごみ削減のため水筒の持参を呼びかける給水器 (子供たちが上半身を捻り、蛇口部分から流れる水を吸っていた) など、自然環境に配慮した行動を呼びかける多種多様な装置が至るところに見られたからである。

脱炭素やエコ・フレンドリーの潮流は、ムスリム社会とも無縁ではない。UAE ではイスラームに関わる倫理やモ

ノ (物)、空間を環境保全に資するように改変する動きが見られる。たとえば、現在生じる環境破壊や汚染をアッラーの言葉や預言者ムハンマドの行いに反するものであるとしてイスラーム的な文脈から発信するムスリム知識人がいる。そのほかには、モスク運営・利用にかかる水や電気の消費を抑える「グリーン・モスク」の建設や、イスラーム金融のサステナブル・ファイナンスへの参入など、建築や制度面での改変も見られる。筆者は現在、こうした多方面に展開するイスラームと環境・気候問題との結びつきについて研究している。

ムスリム社会においても環境・気候問題にかんする記事や書籍類が増えている。とはいえ、エコ、グリーン、サステナブルといった言葉があちこちで目に入ると、その信憑性を確かめたくなる。筆者がひねくれ者ののだろうか。それが本当に環境にやさしいのかどうかという根拠もそうだが、それ以上に、グリーン化を主張する人々が何を考えているのか、なぜわざわざ取り組むのか、その動機や経験を知りたくなるのである。本稿で

は、筆者が UAE で出会った、イスラームの用語や概念を用いながら環境保全の重要性を訴える 2 人の人物を紹介する。



グリーン・モスクを訪問する

ドバイの街を歩いていたのは、あるモスクに向かうためであった。環境にやさしいグリーン・モスクとしてニュースメディアで紹介されていたハリーフア・タージル (Khalifa Tajir) モスクである。ドバイのデイヤラ地区にあるハリーフア・タージルモスクは、2014 年 7 月に「中東地域初の環境配慮型モスク」としてドバイ宗務・ワクフ総局 (AMAF) によって新たに建設された。モスク入り口横の壁面には、本モスクが米国グリーン・ビルディング協会の LEED 認証を受けたグリーン・モスク (GREEN MOSQUE) であることを紹介する証明書のような看板が掲示されている。LEED 認証は、環境に配慮した建物の認証制度の中で最も利用されている制度の一つであり、その基準の達成は国際的なアピールにつながる。ドバイ観光・商務局は観光者向けサイトにて「ハリーフア・タージルモスクは (中東) 地域で最初のエコ・フレンドリーなモスクです。イスラームには自然資源保全の重要性を強調する豊かな伝統があり、この 100 パーセント環境にやさしいモスクはそのことを反映しています」と宣伝している。

何をもって「環境配慮型モスク」を謳っているのか。まず、ハリーフア・タージルモスクは環境負荷の低い、リサイクル

可能な建材で建築されたという。モスクの壁や天井には単色の石膏が使われる一方で、壁面の窓下 1m ほどはオマーン産の大理石が敷き詰められており、高級感を醸し出している。床部のコンクリートの粗骨剤には UAE 北東部のラース・アル＝ハイマ酋長国の砂利が使用されている。また、資源消費を抑える諸装置もセールスポイントである。広場や屋上の太陽光パネルで発電した電気は、屋外照明やウドゥー用水を温めるために用いられている。ウドゥー用水やエアコンの排水は、トイレや庭園の水やりにも再利用される。モスク内には自動制御機能のついたエアコンと LED 照明、遮熱や自然換気、自然光を効率良く取り入れたデザインなども評価の対象となっている。



ハリーフア・タージルモスクのイマーム S 氏は日頃から、入り口横の LEED 認証を見て質問してくるムスリムに、なぜこのような自然資源の保全をするのか、イスラームの教えに引きつけて答えている。たとえば、「食べたり飲んだりしなさい。だが、無駄使いをしてはならない。まことにアッラーは無駄遣いする者を好まない」(クルアーン高壁章 31 節) という章句をもとにエネルギーや水などの資源を濫用・浪費しないよう説いたり、「たとえ川の近くにいても (ウドゥーのための水を) 無駄遣いしてはならない」という預言者ムハンマドの言葉¹をもとにウドゥー用水を節水・再利用する重要性を訴えたり、といった具合である。S 氏は、イスラームは環境にやさ

しい宗教である、と自信を持って語った。

とはいえ、S 氏は「グリーンなイスラーム」の発信役を、国策によって偶然決められた者と言えるかもしれない。モスクと環境に関するイスラームの教えについて語ったのち、S 氏は「ハリーフア・タージルモスクでイマームを務め始めるまで、環境問題に真剣に取り組んだことがなかった」と告げた。S 氏は UAE で生まれ、クルアーンを暗記するなど篤信なムスリムとして育った。高校卒業後はパキスタンに渡り、イスラーム学の修士号相当の学位を取得した。その後、ドバイ宗務・ワクフ総局が管理するイマーム職の公募に申し込み、面接を経て採用に至った。そして、新たに新設されたハリーフア・タージルモスクへの配属が決まり、ハリーフア・タージルモスクの特徴を知るなかで徐々に、環境問題について意識を向けていったという。S 氏にとって、自然環境へのケアと宗教的義務の遵守とが交わる場面は、日常の様々なところにあった。紙を無駄使いしないためレシートを受け取らないこと、砂漠のキャンプ場で廃棄物を放置しないことなど、日常的な出来事における実践例を反芻するように語った。これらの些細な「善行」には、政府からの強制力も経済的な利益もない。そこには、「資源を浪費したかどうか」という基準による神からの評価という動機があるという。他方で、紙の製造に係るコストや環境への負荷を知ってしまえば、何の罪悪感も感じずに浪費することはできない、と直感的な動機にも言及した。このように、S 氏は偶然にも環境保全を訴える役割を負うことになった。その偶然は、日常における自然との関わり方を再考し、その一つ一つにイスラーム的な理由づけを考える機会を S 氏に与えたのである。

グリーン・シェイフに謁見する

ハリーフア・タージルモスクの S 氏がイスラームをエコ・フレンドリーに読み替えて発信する役目を偶然担うことに

¹ アブドゥッラー・アムル・イブン・アル＝アースは以下のように伝えている。教友サアドがウドゥーを行なっているところ、神の使徒がそこに通りかかり、以下のように言った。「なぜこのような浪費をするのだ」。サアドは、「ウドゥーにおいても浪費はあるのでしょうか」と尋ねた。彼は答えて以下のように言った。「ある。たとえあなたが流れる川のそばにいたとしても」(イブン・マージャ 425)。

なった人物だとすれば、次に紹介するグリーン・シェイフは、エコ・フレンドリーなイスラーム言説を自らの環境保護活動、あるいはそれ以上の目標のために活用してきた人物だといえる。

グリーン・シェイフことアブドゥルアズィーズ・ビン・アリー・ヌアイミー氏は、アジュマン首長国のフマイド・ビン・ラーシド・ヌアイミー首長の甥であり、アジュマン政府の環境アドバイザーを務めている。彼はグリーン・シェイフを自称し、UAEのみならずアラブ諸国各地で環境保全活動を実施・支援してきた。ちなみに、ここでのグリーンは単に緑色だけでなく、「G”lobal, ”R”ethink, ”E”nlightenment, ”E”thics, ’we can ”N”ot live alone’ という5つの頭文字を合わせた”GREEN”というスローガンを意味する。アブドゥルアズィーズ氏は2018年からUAE各地で「グリーン・シェイフ・アカデミー」という教育・訓練活動を展開している。筆者は、このグリーン・シェイフ・アカデミーと他NGOとの合同ワークショップに参加することができ、グリーン・シェイフに謁見する機会を得た。

ラス・アル＝ハイマにあるカフェを貸し切って開催されたワークショップは、アブドゥルアズィーズ氏による講義を中心に進められた。議題は「サステナビリティとは何か」であった。10名前後の参加者による自己紹介を終えたのち、アブドゥルアズィーズ氏は「皆さん、サステナビリティとは何か、5歳の子供にわかるように絵を描きながら説明してください」と指示した。A4サイズの白紙のうえに参加者たちは、生態系を模したネットワークや、人間と木々、水、太陽、あるいは山々とその上に神を仄めかす光などを描いた。人々の環境観が垣間見られる。各人の説明を聞き終わったのち、アブドゥルアズィーズ氏は人間、木々、米ドルのマークを描き、サステナビリティとは「未来のために大地を世話すること(i’tinā’）」、そして「人間、大地、植物、動物との間の優しさ(luṭafā’)」と答える」と語った。サステナビリティとは決して複雑なことではなく、人的資源、経済的資源、自然資源を無碍に扱わずに維持

する心がけであるそうだ。そして、正義など一般的な用語、イスラームの用語や章句、さらにはアブドゥルアズィーズ氏自身の造語も交えながら、サステナビリティを実現するために人間が取るべき行動やその指針について議論を行った。2時間ほどのワークショップの最後に、アブドゥルアズィーズ氏は参加者の一人一人に彼自身が著者の本を配っていった。筆者も、何冊か選択肢があるうち、まだ持っていなかった1冊をいただいた。

アブドゥルアズィーズ氏はなぜ環境保全活動に取り組み始めたのか。あるインタビュー記事ではその直接的な契機として、大学卒業後に勤務していた石油会社での経験を語る。彼と他の作業員たちは、ある掘削現場で有毒物質を摂取してしまい、死にかけたことがあった。一命を取り留めたのち、彼は自然資源との向かい方に対する強い意識を持ち始めたという。そして、1996年に環境保全に関わる活動を始めた。それ以来、アラブ諸国の様々な機関で環境関連のアドバイザーを務めるなかで、グリーン・シェイフの名が広く認知されるようになった。その傍らで、アブドゥルアズィーズ氏は環境配慮行動を啓発する著書をいくつも書き上げている。インタビュー動画を見ていると、「サプライズだ。私が書いた本をプレゼントしよう」とインタビュアーに著書を手渡す場面があった。このように事につけて本をプレゼントしているのかもしれない。

アブドゥルアズィーズ氏は、アラブ圏のみならずBBCなど英語圏のメディアでも数多くのインタビューを受ける、著名で多忙な環境活動家である。それにもかかわらず、筆者がインタビューを申し入れると、二つ返事で承した。インタビューに臨む際、彼は、協働や面談を申し入れる者のなかには「下心」を持った者も少なくない、という事情を打ち明けた。グリーン・シェイフがなぜ私に時間を割くのか、という疑問を持っていたが、それは、筆者が経済的なリターンを求めず、イスラームをはじめとする彼の思想的なルーツに迫りたいと告げていたからであった。アブドゥルアズィーズ氏は「私の名や資金が目的になったとき、私の哲

学はどこに行くのか」と訴えた。彼は、イスラームの教えを非ムスリムにも通じるようパラフレーズしたり、自身の環境活動をもとに着想した造語を使ってみたり、独自のサステナビリティ論を、自信を持って展開しており、そうした視点がいかに通用するのか、試しているようにも捉えられた。それは、環境・気候問題であると同時に、グリーン・シェイフとしてのアブドゥルアズィーズ氏の自己実現の問題でもあるのかもしれない。



おわりに：テキストの裏側のストーリー

本稿では、UAEでイスラームの用語や教えを援用しながら環境・気候問題の解決に向けた取り組みを行う2人のストーリーを紹介した。「神からの評価と罪悪感」を結びつけるS氏と、自身のルーツを絡めた「哲学の伝播」を目指すアブドゥルアズィーズ氏、その目的意識は違えども、どちらも理にかなっているように聞こえた。彼らにとって環境・気候問題は自然環境のことであり、それ以外の問題にもつながっている。その結びつきの背景には、様々な偶然や経験が重なっている。

筆者の研究テーマは「イスラームの環境倫理」である。最近では、環境・気候問題について論じるフィクフやファトワー、説法などのテキストを読むことが多い。テキストを乱読していると、それぞれの書き手が理論や思想を書き上げる途中や以前に、その人の経験や利害関係、戦略があることを看過してしまいがちである。イスラームについて深掘りしようと思えば、インタビューは、気が付けば、テキストからは読み取れない裏側のストーリーを聞く「雑談」になっていた。今振り返ると、この雑談は、他者の環境倫理を理解するうえで欠かせない作業な

のではないかと考えている。UAEでの滞在を通じて得られた「学び」は、テキストを離れ、雑談をすることの大事さの再確認であった。言葉にすると陳腐かもしれないが、読者の皆さんも同じように感じる場面があるかもしれない。

(2) ネオオスマン帝国滞在記

同志社大学経済学部 2年

内田 匠

私はトルコ語を習得するためにイスタンブールに9か月間滞在した。トルコ国内における移民や難民の問題、トルコの近隣国であるアゼルバイジャンとキルギスへの訪問、海外における日本アニメの普及と役割について本稿で述べる。

この不条理な世界に生まれ落ちて

私が滞在しているトルコ共和国では、学位を修めるため、出稼ぎのため、戦地から逃れるためといった理由からロシアやウクライナ、パキスタン、チャド、モリタニア、タイ深南部、イエメン、シリア、ミャンマー、新疆ウイグル自治区といった多種多様な国、地域から多くの人々が滞在している。とりわけ、戦争の関係でロシア系やシリア系の移民や難民が多く、イスタンブールのどこを訪れてもロシア話者やアラビア話者が街中を闊歩している。そんなイスタンブールの中でも、ひと際目立って移民が集住しているファーティフ地区では、アラブ人経営の日用品店や食料品店、次いでロシア国内から国際送金ができる店舗の看板が目立ち、他にもイエメン料理屋、ウイグル料理屋、コーカサス料理屋などトルコ国内ではあまり見かけない多国籍料理屋で街が埋め尽くされている。道路には、ウクライナのオデッサからイスタンブールまで運行されているバスが見られる一方で、モールで買い物するロシア人を近くで待つ大型バスが路上駐車されている。この地区では新規の滞在許可証を取ることができないほど、多くの外国人が殺到している。

私はファーティフ地区の隣の学生寮に住んでいる。私が滞在する寮に所属する外国人の出身地域のおおまかな構成比は以下のようになっている。チェチェン共

和国やタタールスタン共和国のようなロシア連邦内でもムスリムの住民が多いエリアからの留学生が三割、ウズベキスタン、カザフスタンといった中央アジアからの留学生が二割、チャドやエジプトのようなアフリカからの留学生が三割、シリアのようなアラブの近い国からの留学生が一割、アフガニスタン、パキスタンなどその他一割といった具合である。彼らはそれぞれ独自の理由や目的からイスタンブール市内の大学に進学している。

私が聞いた限りでの、各地域からのトルコ留学の理由や動機を以下で紹介する。ロシア連邦出身者の多くは戦争の関係で本来望んでいたロシア国内での進学をやむなく諦め、また兵役を逃れるため仕方なくトルコに留学している。中央アジア出身者はトルコ語と近いテュルク諸語を母語とするため、その中で経済的・文化的に強いトルコで学位取得を志している。イエメン人やシリア人の若者は故郷が紛争状態にあるため、小学生や中学生の頃に家族総出でトルコの都市へやむなく移住、そのままトルコ国内で進学、就職する。アフリカ系の学生は、トルコ政府から月100ドルと学費免除の奨学金を受けるような優秀な人材が多く、トルコの大学を卒業後はトルコと学位協定を結ぶドイツなどのヨーロッパの国々に進学し移住することを夢見ている。

私が滞在している寮で一番使われている言語はロシア語である。タタールスタン共和国、チェチェン共和国出身者に加えてカザフスタン、トルクメニスタンといったロシア語圏の中央アジア出身者達がロシア語で会話する。タタール人のルームメイトはトルコに来てから寮内のチェチェン人と話すことでロシア語が上達したと冗談を飛ばしていた。以上のような多国籍な環境から移民に対して一見寛容に見えるトルコ共和国ではあるが、2023年現在では、今までは職務質問が行われなかったようなターミナル駅や観光地、住宅街にて私服警官から私を含む外国人に対して滞在許可証の提示が求められるようになった。現に同じ寮に住むアフガニスタン人の学生が警察に連行されたまま、いまだに姿が見えな

い。この国では祖国に帰ることができない多くの人間が生活を営んでいる。私もトルコに1年間滞在するための手続きを全て自分で行ったが、ビザなしで滞在できる期限ギリギリまで滞在許可が下りず、携帯電話の回線も止まるといったトラブルにも遭遇した。精神的にかなりきつかったが、この国以外に行き場がないシリア人やイエメン人の境遇を考えれば自分の苦労はなんてことがないように思えた。この国に住む外国人に祝福と平安があるように常に心の中で祈っている。

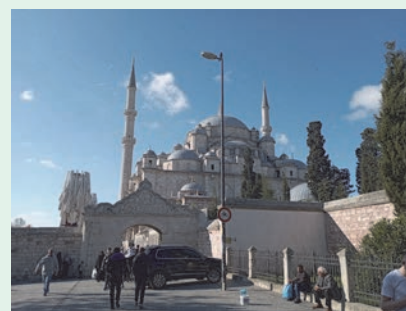


写真1 ファーティフ地区で有名なモスク。近辺にシリア人が経営する店が並ぶ。

宗教実践は一つではない

イスタンブール留学中に私はトルコの近隣国家であるアゼルバイジャンとキルギスを訪れる機会を得た。本章では訪問エピソードを紹介する。

アゼルバイジャン

イスタンブールで知り合ったアゼルバイジャン人に実家に招待された。インターネットでアゼルバイジャンと入力すると検索候補に「産油国」、「金持ち」と必ず表示される。実際、飛行機から空港内に入った瞬間、これまで自分が利用した空港の中でも特段きらびやかな照明と洗練された設備が広がっていた。また首都のバクー中心部も同様に湾岸の国を彷彿とさせるような奇抜な形のビルが立ち並んでいた。しかし、それとは裏腹にバクー市内を離れてすぐの半砂漠地帯では、野菜や果物の路上販売をする農家、羊飼いや、アルメニアとの戦争で亡くなった兵士を弔う墓石や写真、アゼルバイジャン・アルメニア両国の係争地であるナゴルノ・カラバフへ軍隊を派遣するアゼルバイジャンの友好国であるトル

コの国旗などが目立った。バクーから5時間ほど車で移動して、アルメニアとジョージア国境沿いにある友人の実家に到着した。村のどこもかしこも家の塀が高かったが、これは万が一、戦場になってもいいように少しお金をかけていると説明していた。日本でいう春分の日、ノヴルーズが3日間祝われていたこともあり、彼の親戚一同が彼の実家とその近辺に広がる村に集っていた。連絡を取り合うことなしに、お互いの家を1日5軒ほど訪問して鶏肉や牛肉の煮込み料理、ハーブなど口直しのための生野菜、その期限定の砂糖菓子などをつつき、トルコの国営放送のドラマを流しながら、各々近況報告していた。これを5日間ほど繰り返した。その期間中に、私はこの村でのソ連の教育や文化の影響力の強さを示す以下のことを体験した。

彼の親戚は皆シーア派のイスラーム教徒であるが、友人の妹の婿夫婦の家にある半地下の部屋で、ベラルーシで学位を取得し現在は歯科医として勤める婿と友人の母方の親戚等、計10人が半地下の部屋に籠り、「お互いの健康を！」との合言葉でお互いウォッカを飲みあっていた。また、友人と彼の母に付き添って墓参りにも行ったが、通常のイスラーム教徒の墓とは異なり墓地のほぼ全ての墓石が写真付きで、彼の父の墓も例外なく等身大の写真が石にプリントされていた。言語も世代間によって違いがあり、スマホの言語設定が若者はアゼルバイジャン語、高齢者はロシア語をメインで使用していた。村の広さや人口に対して明らかにモスクの数が少なく彼の親戚が礼拝している様子もなかった。彼の母は普段は家に一人で籠りがちで孤独や不安を感じているのだが、一人息子である友人はクルアーンやハディースを読むことで解決すると力説していたが、彼の母はそれらを読むことに多少の抵抗がある様子だった。このようにイスラーム的価値観を持つ私の友人とソビエト時代に教育を受けた彼の母との間に宗教意識の隔たりを感じた。友人も過去にはウォッカを飲むなど宗教実践に熱心でないムスリムであったが、イスラーム世界の著名な導

師の動画や論文を通じて信仰心が目覚めたらしく彼は親戚の中でただ一人礼拝を実践するムスリムとなり、現在はトルコ共和国で博士課程に在籍している。



写真2 村出身の戦死した兵士の写真とトルコ国旗

キルギス

トルコ語の語学学校で知り合ったキルギス人の友人からラマダン月にビシュケクの実家に来るように誘われ数日間訪問した。首都ビシュケクの中心部は少し古めのアパート群や省庁のビルなど旧ソビエトの連邦国家を想起させるような建物も多くあった一方で、トルコ政府が建造した中央アジアで一番大きなモスクやトルコ語を教えるための大学などの新しい建築物も多く、トルコの文化的・経済的な強さを感じた。首都の中心部にある友人の実家にはウォッカのグラスジョッキを収納する棚があった。それらは来賓用にあるもののほとんど使われていないらしく、友人とその兄弟はムスリムが行う断食や礼拝を行っていた。友人とその家族は小学校から大学に至るまで全てロシア語で教育を受けたため、家庭内ではほぼロシア語、稀にキルギス語が使用されていた。彼の友人のほとんどがロシア語で意思疎通をとっており、中にはキルギス語が一切できない者もいた。大学時代は韓国のマッコリやウォッカを堪能していた彼は国際関係学の修士課程で知り合った指導教官に感化され数年前から宗教実践するようになったという。このように旧ソ連圏の若年世代のムスリムの宗教実践の高まりは私の目を引いた。

アニメはリングフランカ

最後に、私がトルコ留学中に日本人として実感したアニメのコミュニケーション

ツールとしての力を紹介したい。トルコやムスリムが多く住む国では日本のアニメの影響力が並ではないと留学経験のある先輩方から聞いていたが私が直面した状況は想像を遙かに上回っていた。トルコしかり多くの国でアニメは違法サイトか現地の地上波で視聴される。とりわけ、違法サイトの更新ペースは速く、放送終了後の翌日には現地の言語の字幕付きでアップロードされる。音声は日本語のままであることが多く、アニメの視聴のみで日本語会話を習得したオタクに街中で時々話しかけられる。日本人であると紹介して私がそこまでアニメを視聴していないとわかると、キルギス人からナルトを、イエメン人から今期のラブコメを、ジブチ人にドラゴンボールをそれぞれ勧められた。彼らの期待に沿うべく私もアニメを少しずつ視聴し始めた。どこにでもいるロシア人と会話をするために簡単な単語を覚えてチェチェン人含むロシア語話者と会話を試みたが、ナルトの声真似や主題歌のハミングをしたほうが彼らの反応はよかった。イスタンブールで学生向けに行われる日本文化、とりわけアニメに関連するイベントに足を運ぶと、必ずといっていいほど日本人と一度も話したことがないにもかかわらず自然なアクセントの日本語で話しかけられる。これだけアニメを通して日本文化を学び、日本語を学習するオタクの数に対して、トルコ共和国内ではこれらの日本文化を扱う教材や教員が不足している。



写真3 トルコ政府宗務庁出資のモスク

2. この一品——私の研究モノ語り

自身の研究に深く関連する「モノ」にまつわるエピソードをご紹介いただく本コーナー。今号では、過去から現在に至るまでの膨大な時の流れを感じられる、2つの「モノ語り」をお届けします。

(1) ウォロフ語音声資料を文字データにするまでの道のり：記録、書き起こし、翻訳

日本学術振興会 PD（東京大学総合文化研究科）
池邊 智基

アフリカの最西端、大西洋に面したセネガル共和国は、国民の9割以上をムスリムが占めており、そのほとんどがスーフィー教団に属している。そのひとつであるムリッド教団について研究していた私は、教団内の組織ごとで行われるウォロフ語の説教 (*waxtaan*) を対象に調査していた。説教は祭や集会の際に宗教的権威によって語られるもので、口頭伝承を用いながら教義や宗教的知識を情感豊かに伝える言語実践である。元来文字を持たず、アラビア語を母語としない西アフリカ諸地域の人びとであっても、数多くのアラビア語／文字資料を生産し、流通させてきた。それと同時に、口頭による宗教的な知の伝達も重視されており、多くの信徒は宗教的権威の説教を頻繁に聞いているのである。その形式と内容の具体的な事例から分析するため、いくつかのツールを用いて説教を記録していった。

説教の調査は、①祭に参加して説教を録音・録画し、②その音声資料をもとに書き起こし、その後、③書き起こしデータを翻訳するという手順で行った。音声や映像を使った調査は、機材の性質と、分析したい内容によって様々な方法があり得る。以下に記す手法は、あくまで私が研究対象に合わせて試行錯誤を繰り返しながら確立した方法論である。

ムリッド教団の祭は多くの信徒が集い、

朗唱実践や説教をしたり、豪華な食事を食べる饗宴を開いたり、集団礼拝をしたりと、熱狂的な空間である。一ヶ月に一度は開催されるほどの高い頻度で、セネガル各地で祭が開かれている。祭で説教が行われるのは深夜近くのことである。日中はみなで夜の饗宴の準備をするため、参加者たちと野菜の皮むきをしたり、皿を運んだりして過ごす以外に私にできることはほとんどない。なるべく臨機応変にその場の状況に対応できるようにコンパクトな機材を携帯しながら、記録すべき機会を待ち続けることになる。私が持ち歩いていたのはレコーダー、一眼レフ、ビデオカメラ、三脚、そしてフィールドノートの5点セットである。三脚は専用の肩掛けホルダーに入れ、その他の機材は肩掛けカバンに入れていた。そうすれば、どこにいてもすぐに記録が可能となる。私の場合は、何度も聞き返しながら書き起こし作業と分析ができればよかったのも、そこまでの音質・画質にはこだわらなかった。書き起こしと翻訳作業は、教団内部の組織で宗教活動に参加している調査助手とともにいった。

失敗続きの録音と撮影

録音には Zoom H1 を用いた。H1 は1万円程度で手に入る高音質なレコーダーで、小型で携帯しやすい上、複雑な操作がほとんどいらず、録音ボタンを押すだけで操作が可能である。なお、現在 H1 は生産終了したが、さらに機能がアップデートされた H1n がある。

レコーダーを扱う上で注意しておきたいのは、当然のことながらきちんと録音できているかの確認である。説教ではマイクとスピーカーを使った爆音で話されるため、録音できる音量の調節を事前に行っておかなければ、音割れしてしまっていることもしばしばある。大体はオート調整機能で問題ないが、イヤホンをつけて集音状況を確認しつつ録音するべきである。もう一点重要なことは、風や持ち手で拾ってしまう雑音をなるべく除去す

ることである。Zoom 製品には付属キットとして持ち手となる柄や、屋外録音用のスポンジ型ウィンドジャマー（風切り音を除去するためにマイク部分につけるもの）が販売されている。一見すれば、取り付け用のネジがついた棒とスポンジであるが、それがあただけで雑音が明らかに減る。

初めて説教を録音した2018年9月の調査では、レコーダーだけを手に持って椅子に座り、その場の様子を逐次フィールドノートにメモをとりながら行った。この録音はうまく録れていたものの、失敗もあった。それは、音声データとメモだけでは、現場の語り手や聴衆の状況をかなりの部分見落としていたことである。私はウォロフ語の会話がある程度わかるが、多様な文脈を含み持つ説教の内容をただ聞いているだけで理解することはほとんどできない。いつ終わるともわからない説教を、現場で聞き続けるのはなかなか集中力が保てず、気づけばぼんやりと別のことを考えてしまうことも多い。しかもそのとき私は虫刺され痕が膿んで蜂窩織炎になり、同時に発熱もしていたため、いつも以上にぼーとした状態で録音をしていた。首都に戻ってから、同じく祭の現場に居合わせていた調査助手と書き起こしをした際、フィールドノートのメモを読み返して記憶を呼び起こしつつ場面ごとの状況を確認した。当然ながら、ぼんやりとしたまま記録した音声とメモだけでは、その場の状況と照らし合わせるができず、調査助手が適宜解説してくれたことでなんとか理解ができた。そのときの反省を活かして、次の調査からは同時に映像の撮影も行うことにした。

2019年の調査では、SONYのビデオカメラ (HDR-PJ760V) で撮影した。当初は右手にカメラを持って、左手でレコーダーを持って対応していたが、1時間を超える説教を撮り続けていると、次第に右手の感覚がなくなっていく。何度か祭に参加するうち、説教の語り手と聴衆を全体的に見渡せる場所を見つけて、そこに三脚を置いて同時にレコーダーでの録音も行うのが比較的楽に撮影ができ

ることがわかった。説教の途中に興奮した聴衆が踊り出し、三脚に衝突するなどのハプニングもしばしばあったが、その後は調査助手がカメラマン席として場所を空けておいてくれたところに移動し、より気楽に撮影ができた。ちなみにレコーダーをビデオカメラのマイクとして取り付けることも可能ではあるが、すぐに機材を取り出して撮影すること、そしてどちらかのバッテリーがなくなってもデータを残せることを理由に、音声と映像は別撮りにした。

表記と意味の仮固定：書き起こしと翻訳の地道な作業

祭から帰ってきた1週間後には、なるべく記憶が鮮明なうちに記録した音声ファイルをもとに書き起こしをした。録音と撮影にもかなりの体力を使ったが、書き起こしの作業の方が、時間と労力がかかって辛いものであった。毎日朝から夕方まで調査助手と作業をしても、1時間程度の説教を書き起こすのに1週間以上かかったほどである。

書き起こしには、Interview Writer (Mac OS X v10.9以降) というソフトを用いた。これは、インタビューによる生活史調査を行っている社会学者・岸政彦が発案し、作成された、音声データの書き起こし/文字起こし補助ソフトである。音声データを読み込んだ画面で簡単なコマンドの入力をすれば、再生、停止、少し巻き戻したところからまた再生ができ、その都度書き起こしが可能となる。説教の独特の抑揚やリズム感を意識して書き起こしたかったため、Interview Writerはその点でも非常に使いやすかった。

私が調査助手との作業で自然と確立していった書き起こしの方法は、非常に単純なものである。Interview Writerで読み込んだ説教の音声データを5秒おきに巻き戻して聞き返しつつ、調査助手がゆっくりと口頭で再現し、それを私がキーボードで入力する。この手順を繰り返していく。調査助手が言い直したとしても私がうまく聞き取れないこと、そもそも説教自体が早口だったり音がこもっ

ていたりして調査助手ですら聞きとりにくいことも多く、2人でスピーカーに耳を傾けながら何度も聞き返しては、キーボードでタイプしていった。

繰り返しになるが、私はウォロフ語を使って調査していたものの、あくまで初学者に毛の生えたようなものである。書き起こしにはただでさえ難点があるが、最大の問題は「正しい」書記法がよくわからないまま次々と文字化していかないといけないうことである。現在セネガルで国民の9割が話せるウォロフ語は、もともと文字を持たない話し言葉である。1970年代に政府によって書記法が確定されたものの、現代に至るまで変わらず公用語のフランス語で学校教育が行われるため、セネガル人のほとんどが「正式」な書記法を習うことはない。多くの人はフランス語式の、揺れの多い書記法でウォロフ語を書く。例えば、「ありがとう」を意味する「ジェレジェフ」を「正しい」書記法で書けば jërëjëf だが、フランス語式の書記法では diere dief や dia dief となる。そのため、ウォロフ語話者にスペルを説明されたとしても、子音と母音のセットだけでなく、単語の区切り方すら違ってくるのである。

ウォロフ語の「正式」な書記法でなければ文法書で学び、ウォロフ語-フランス語辞書で単語を索引することができない。私は調査を始めた頃からなるべく「正しい」書記法で学び、調べ、書くということを意識してきたが、すべて独学であるため知らない単語はちゃんと表記できない。一方、私の調査助手は家庭の事情で中学校を中退しているものの、その間に受けたフランス語教育のおかげでフランス語の読み書きはできるが、多くのセネガル人と同様にウォロフ語の「正式」な書記法は知らない。そのため、私と調査助手との書き起こし作業は、お互いがあやふやなままで表記を「仮固定」していくようなものだった。しかしながら、辞書で確認しつつ翻訳するためには、子音と母音を仮固定させておけば、あとは単子音が重子音、あるいは長母音か短母音かによって索引すべき箇所を限定させることができる。特に日本語話者にとっ

て違いを認識しにくい」とrの違いを確定させることは最も難しかった。例えば、私が漫然と聞き流したまま rakk (弟、妹) だと思ってタイプすると、調査助手がすかさず「そこはlだから、lakk (言葉) だ」と指摘してくれる。そこで指摘された音も何が違うかよくわからずに困惑する私を見て、調査助手は呆れたような笑みを浮かべつつ、「いまの話の流れではこういう意味になるんだ」と根気強く説明して、訂正してくれた。

こうした表記の仮固定をしながらの書き起こしは、調査助手自身も現場で聞きそびれていたことや咀嚼して再解釈できることも多く、突然思いついたように解説を加えてくれたことも多かった。例えば「彼は彼に言った」のように三人称単数の代名詞が何度も登場した際、それが一体、どの時空間の、誰のことを指しているのかが判別できず、文脈を捉えきれないことがある。説教では、植民地期の口頭伝承に現れる聖者や、現代において活動している教団内の重要人物、さらには神や預言者たちなど、時空間をまたぎつつ複数の人物が登場するためでもある。書き起こしをしつつも、同じ箇所の映像を2人で確認し、登場人物の整理をする作業も同時に行うことで、場面ごとの意味内容もまた、仮固定しつつ理解できる。表記と内容の仮固定がある程度できたことで、帰国後に私1人でもゆっくりと文意を捉えながら翻訳が可能となった。

以上が、調査助手の助けを借りながら私が行った説教の調査方法である。思い返してみても、いろんな試行錯誤をした割に、かなり地味な方法論である。この手法については、もっと高学歴で、ウォロフ語の「正しい」書記法を理解している人に書き起こしをしてもらえばよかったのでは、という助言を受けたこともある。真つ当な意見である。だが、ウォロフ語の書記法がわかり、かつ長時間の書き起こしをするような時間的余裕がある人というのは非常に稀有な存在で、見つけるのはなかなか難しい。その上、私の調査助手のように組織の内部にいる人間でなければ、説教で語られている内容を

即座に理解することはかなり難しかっただろう。実際、調査助手以外の何人かに書き起こしを試しにしてもらったが、表記にしても内容の理解にしてもあまり満足いくものではなかった。私が調査助手と二人きりでやった作業は、とても地味で遠回りなようである、実は一番の近道だったと思っている。

(2) タアリーフを捜し求めて

日本学術振興会 PD (東京大学総合文化研究科)

末野 孝典

サハラ以南アフリカの歴史の扉を開く

「シヴィライゼーション」というゲームをご存知だろうか？ 端的に言えば、プレイヤーは複数ある文明の中からひとつ選択し、人類の夜明けから情報化時代までの長い時間のなかで、世界史上名を馳せた偉人たちと対立・交渉を繰り返しながら、他の文明よりも高度な文明を築き上げることを目指す戦略ゲームである(ちなみに第Ⅶシリーズが今後リリースされることが発表されたが、発売時期は未定)。シリーズ毎に異なるが、秦の始皇帝、アイユーブ朝のサラディンなどがゲーム内に登場する。

そのうち、本稿において絶対に触れることを忘れてはならない人物は、第Ⅴシリーズに登場したアスキヤ・ムハンマドである。おそらくサハラ以南アフリカ——アフリカ大陸の中でサハラ沙漠の南に位置する地域——の歴史のなかでも、彼の名を知っている読者は決して多くないだろう。それに比べて、マリ王国の最盛期の王であるマンサー・ムーサーがマッカ巡礼の順路で立ち寄ったカイロで大量に金を消費し、その価値を大暴落させた逸話については歴史好きな方だと知っている方もいるのではなかろうか。しかし、当時の筆者は、この謎に満ちたアスキヤ・ムハンマドという人物に惹かれた。

筆者がサハラ以南アフリカの歴史・思想に興味を抱いた経緯は複数あるにせよ、このゲームでソンガイ王国を選択したことが、今思えばサハラ以南アフリカの歴史の扉を開くことに繋がったのかもしれない。

サハラ以南アフリカの歴史叙述のはじまり

サハラ以南アフリカは「無文字社会」であると長らく揶揄されてきた。しかしながら、当該地域において現地の人びとが書き残した文字史料が全く存在しないわけではない。それらのうちでもアラビア語史料群は、西欧がこの地域を植民地支配する以前の貴重な歴史情報を我われに提供してくれる。

歴史はアラビア語で「タアリーフ」と呼ばれる。イスラーム圏では、歴史家タバリ(923年歿)が『諸使徒と諸王の歴史』(*Ta'riḫ al-rusul wa-l-mulūk*)を著して以来、実にさまざまな意図や目的から歴史書が書かれてきた。そしてサハラ以南アフリカも例外ではなく、数々の歴史書の類が編まれてきた。当該地域における歴史叙述のはじまりをどこに見定めるのかは、研究者の間で解釈が分かれており一概には言えないが、17世紀を境に歴史を伝える状況はトンブクトゥを中心に劇的に変化したとされる。その転換期に位置づけられるのが、アブド・アッ=ラフマーン・アッ=サァディー(1656年以降歿)によって作成された『スーダーン年代記』(*Ta'riḫ al-Sūdān*)である。この史料は、ニジェール川中流域を舞台に展開した国々の歴史を知るうえで重要な史料のひとつと見做されている。この年代記は大別すれば、ソンガイ王国成立以前の逸話、ソンガイ王国の歴史、ソンガイ王国崩壊後の歴史といったように三部から構成されている。特に第二部は、冒頭でも言及したアスキヤ・ムハンマドとその末裔たちの歴史に重点が置かれている。

ここで、『スーダーン年代記』が今日に至るまで知れ渡ることになった経緯について触れておきたい。事の発端は、ドイツ人の探検家ハインリッヒ・バルトが、19世紀半ばにアフリカ大陸中央部を探検した際に立ち寄ったハウサランドのグワンドゥという町で『スーダーン年代記』の写本を初めて実見したことによる。彼は滞在日数の問題もあり部分的にしかその写本を書き写すことができなかったが、『スーダーン年代記』を初めて西欧に伝えることに成功した。だ

が、この史料が西欧の学术界に知れ渡るようになるまでにはもう少し時を俟たねばならなかった。その契機となったのが1898-1900年に出版された、オクターヴ・ウダとその義理の息子であるモリス・ドラフォスによる『スーダーン年代記』の校訂・仏訳であった。この校訂本は、パリ国立図書館が所蔵する三つの写本を基に校訂されたのだが、筆者が調べていくうちにサハラ以南アフリカの大学や研究機関にも写本が幾つか存在することが判明した。そこで筆者は可能な限り、他の写本も見たいと思い、これらの写本に会いに行くことにした。



歴史の海を泳ぐ

セネガルの首都ダカールに位置するダカール大学の所属機関のひとつである黒アフリカ基礎研究所——セネガルがフランスから独立する以前はフランス領黒アフリカ研究所——は、西アフリカについての歴史学・地理学・人類学などのさまざまな学術研究の中心的な役割を担っていた。その最上階の一室にイスラーム学研究室がある。そこには、アラビア語写本コレクションが数多く残されている。



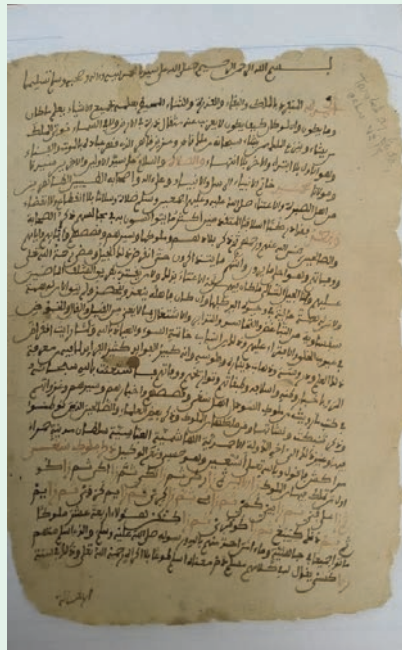
筆者は2019年3月にセネガルのダカール大学でアラビア語の写本調査をす

る機会を得た。イスラーム学研究室に入室し、司書 SG に挨拶を済ませると、早速お目当ての『スーダーン年代記』の写本番号 (Fonds Brevié 19) を司書に伝えた。すると、数分後には写本の現物を閲覧することができたのだが、ここでひとつ問題が発生した。それは写本を渡される時に、司書の方から写本の写真撮影が不可と伝えられたことであった。どうにか事情を説明して写本の写真撮影をお願いしてみたものの、慣習上、例外は認められないとのことだった。筆者は一時落胆したが、司書の指示通りひたすら写本をノートに筆写することに決めた。葉数にして 16 葉足らずだが、思いの外に大変な作業となった。この研究室を利用した経験のある方は納得して頂けると思うが、とにかく昼休憩が 12 時から 3 時までとやたら長い。午後 3 時までに時間を消費するのが何よりも大変である。黒アフリカ基礎研究所の真向いには大西洋が広がっているので、海岸に移動し海を眺めながら、ときにノートを見ながら写本の写し間違いがないかを確認してどうにか時間を浪費する。午後 3 時から 6 時まで (司書の方の都合により 5 時までのときも多々ある) なので、休憩時間が終わると、急いで作業の続きに取り掛かるが、1 日で 1 葉程度書き寄せたら良いほうであった。

こうして、筆者は研究室を毎日訪問しては『スーダーン年代記』の写本をノートに書き写すという作業を繰り返す日々を送ることになった。時として司書の用事で閉室の場合もあるなど若干のトラブルに見舞われることもあったが、2 週間程度の日数を掛けて写本の書き写し作業を完遂した。いざ終わるとなると、何とも言い難い達成感に満たされ、しばし心地よい気分になっていた。すると、長きに亘る地道な書き写し作業は司書 SG の琴線に触れたのか、「1 枚だけです」と優しく筆者に声をかけてくれた。その結果、筆者は『スーダーン年代記』の写本の一部のみを撮影することを許可されたのであった。

現代ではトルコのスレイマニエ図書館など写本のデジタル化が進展し、以前

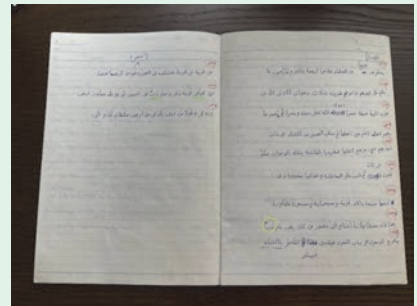
よりも写本のアクセスは容易になったが、その反面、直に写本に触れられる環境は珍しくなりつつある。紆余曲折あったものの、写本の材質・文字のクセなどを自らの身体を用いて知ることができたのは、筆者にとって大変貴重な機会であったと言える。



伝播する歴史

『スーダーン年代記』に端を発する年代記史料の登場は、サハラ以南アフリカの歴史叙述の方向性を大きく変えたことは既に述べた通りである。ここでは、『スーダーン年代記』の影響について指摘しておくことにしたい。例えば、ムハンマド・アル=バルティリー (1817 年歿) による『感謝者の開示』(Fath al-Shakūr) は、西アフリカで活躍した知識人の情報を纏めた^{タバカート}列伝の類の著作であるが、同書は『スーダーン年代記』からの情報に依拠している部分が多い。それに加えて、筆者が確認したところでは、黒アフリカ基礎研究所が所蔵する『マリ国についての記述』(Dhikr bilād al-Mallī) にも、『スーダーン年代記』からの抜粋・引用が随所に見受けられる。例えば、マリ王国やジェンネおよびトンブクトウの学術都市などを扱った『スーダーン年代記』の幾つかの章が本来の文章よりも手

短に記述されている。また写本の末尾にある奥付には、シャイフ・アル=マウルード・ブン・アリー・アフマーディンという写字生が、ヒジュラ暦 1326 年ラビウ第 1 月 (西暦 1908 年 4 月 3 日) にカラという地で、ジャアファル・ブン・アル=マフディーの手によって書き写されたものから書き写したと明記されている。



このことから『スーダーン年代記』だけでなく、その断片群までもがサハラ以南アフリカの各所で流通・伝播していたことが判るだろう。その裏付けとして、マリのトンブクトウにあるアフマド・バーバー高等イスラーム研究所やニジェールの首都ニアメに置かれる人間科学研究所などが所蔵するアラビア語写本群のうちには、『スーダーン年代記』の写本とその断片群と思わしき写本を幾つか確認することができる (情勢が許せば、いつかこれらの写本に触れたいものである)。だとすれば、推察の域を出ないかもしれないが、17 世紀半ばに作成された『スーダーン年代記』は、幾度となく写本や断片が書き写されていることから、当該地域において歴史を書き残す術を定着させるのに貢献したと言えるだろう。では、何故『スーダーン年代記』の作者サアディーはこの地域に歴史を書き残す大切さを伝えねばならなかったのか。その意図は序文に明記されている。序文には、遙か昔の祖先は自分たちの歴史を語り伝えていたが、後の世代になると、歴史を語ることの大切さを忘れてしまった、といった内容が書かれている。つまり、サアディーは失われていた歴史を語り伝えるという行為を蘇らせるためにも、この書を編んだのである。サアディーの意図がどれほど成功したのかに

ついて判断するのは難しい。だが、現地の人びとが歴史＝記憶を保持するために『スーダーン年代記』やその断片群を書き写してきたことから想像するに、彼の目的は一定程度成功を収めたと言えるのではなかろうか。

サハラ以南アフリカにおいて歴史がどのように語り伝えられてきたのか、時代・地域ごとに歴史叙述の仕方にどう

いった特徴があるのかについては、まだまだ不明な部分が多い。裏を返せば、この分野は可能性に満ちている。とはいえ、日本にない史料を現地へ赴き、渉猟するのは苦難の道の連続である。史料の許に辿り着くと、アフリカに生きた人びとが伝え残した〈文字〉や〈声〉に寄り添いながら、彼らとの対話を始める。そして対話を繰り返すなかで、彼らが書き残し

た歴史への思いを真摯に受け取る。この作業を通して、彼らが自分たちの歴史をどのように紡いできたのか考えを巡らせる。このことは、アフリカの歴史叙述——ひいては人類にとって歴史を語り伝えることは何か——を考えるうえで重要な問いとなる。こうした大きな問いを未来に投げかけたところで、この雑文を閉じることにしたい。

3. 新任スタッフ紹介

着任のご挨拶

木村 風雅（東京大学中東地域研究センター特任助教）

2023年度より UTCMES の特任助教に着任した木村風雅です。東京大学イスラム学研究室博士課程在学中に本誌にトルコへの留学記を2度掲載していたこともあり、学生時代からご縁のあるセンターで働かせていただくこととなり、幸いです。

さて、私が留学していたトルコはオスマン朝からのイスラム学の伝統が残る（とされている）国です。もちろん、今から100年前（1923年10月29日）に世俗国家として独立したトルコ共和国は、1924年にカリフ制を廃止して以降、そもそもアラビア語でのアザーン（礼拝の呼びかけ）やヒジャーブ（ムスリム女性の髪を隠す被り物）の着用、またタリーカ（イスラム神秘主義教団）の活動を禁じるなど、脱イスラム・脱宗教を表立って掲げた近代国家の1つでした。しかし、その後も地下活動としての宗教教育や各地の神秘主義教団の活動は途絶えることがなく、イスラムに親しみを覚えた地方の多数派を代弁する現エルドアン政権誕生以降は、イスラム教育団体への支援などが再び盛んとなり、オスマン朝以来のイスラム学知や宗教教育の「伝統」が再び喧伝されることとなりました。

このイスラム学知や教育の「伝統」の特徴を一言で言い尽くすことは困難ですが、その大きな特徴の一つは、「師匠と弟子の関係性（または連続性）」の重視と言えます。ここでの「連続性」とは、イスラムの預言者ムハンマドに連綿と連なる（と信じられた）学者や聖者を通じた知の連続性を指し、実際にイスラム法学やクルアーン読誦学の免状には、預言者ムハンマドから預言者の弟子である教友（サハーバ）を介して数世紀を経て自分の師匠にまで連なる全ての学者や聖者の名前が記入してあることがあります。

したがって「伝統」的なイスラム教育の特徴の一つは、目の前の教師や師匠から自分自身に対してその知が新たに受け継がれているという認識を喚起する教育システムである点です。この世界観や教育システムを支えるエスプリは、武道家の内田樹さんの言葉を借りれば、まさに「先生はえらい」の精神であり、先生の周りに集う生徒たちが新たに知を拡大再生産する共同体主義のイスラムです。

それでは、伝統的でないイスラムとはどのようなイスラムでしょうか。具体例を通じて考えると、オスマン朝の伝統に政治的にも宗教的にも反旗を翻した（あるいは疑義を呈した）近代以降のサラフ主義の思想はその一例かも知れません。彼らは西欧列強が植民地主義を通じてムスリム諸国を侵食する中、イスラム世界を代表するオスマン帝国の弱体化の要因の一つが、宗教解釈を独占する旧態依然とした学者集団（と神秘主義教団）の退廃にあると考えました。確かに今でも伝統的なイスラム教育の現場では、平信徒（'awāmm）が教師の手解きや講釈なしに勝手に啓典クルアーンやハディース（預言者の言行）を読んではいけない（実際に筆者自身がイスラムを学び始めた頃にトルコ人の教師から受けた言葉）という世界観が存在し、実際に伝統的な宗教教育プログラムに参加する際も、これまでの読書歴を記入する欄には「誰（どの先生）と読んだか」を記入させられることがあります。この世界観から抜け出してほぼ独学でハディース研究に勤しみ、伝統的なイスラムの学派体制を批判し、ムスリム個々人が預言者ハディースや教友の言行を通じて初期イスラム共同体の模範に立ち返る復古運動を提唱した一人がアルバーニー（Nāṣir al-Dīn al-Albānī, d. 1999）でした。アルバーニーに代表されるサラフ主義の思想が近現代で力を得た理由の一つは、近代化の過程で識字率が向上したり、デジタルデバイスの機能（膨大なハディースへのデジタル検索機能など）が向上した

りするなど、平信徒の個人主義的な宗教解釈の環境が整ったことも関係しています。また、そもそも教師が十分に存在しないムスリム少数派社会や、知の個人消費に慣れ親しんだ近現代の改宗ムスリムにとっては、教師抜きでの啓典解釈を規制する伝統的な教育システムよりも、独学（という知の近代化の産物）に親和性の高いサラフ主義に傾倒しやすい傾向があるとも言えます。

以上の点から、カトリックとプロテスタントの対立に喩えられることもある伝統主義とサラフ主義の知的対立は、今でもトルコや湾岸諸国を旅すると肌で感じられることがあります。私自身は、「慣行と共同体の民（ahl al-sunna wa al-jamā'a）」（所謂イスラム多数派のスナナ派）において、個人主義的な宗教解釈がどこまで許されるのかに関心があり、サラフ主義の方法論（特に教師が不在の状況下での個人的な宗教理解）の正統性を検討するテーマを博士論文の題材に選びました。私がイスラムの勉強を始めた学部時代の当初は、「無頼のレジスタンスはカッコイイ！」との思いからサラフ主義に惹かれた面があったのですが、最近の（少なくとも私の周りにいる）サラフィーは古典ではイブン・タイミーヤかイブン・カイイム、現代ではイブン・バーズカアルバーニーのファトワー（法學問答集）の話ばかりに終始している感が否めず、個人主義においては知的大スターの存在抜きでは知的生産性が廃れるのだろうか少し残念に思っている今日この頃です。

自己紹介が長くなってしまいました。本センターではトルコや中東はじめムスリム諸国を広く旅してきた経験を活かして、少しでも中東地域研究やイスラム研究、教育の進展に寄与できればと思います。

4. 駒場中東セミナー開催報告

東京大学中東地域研究センター(UTCMES)では2023年度前半期に、(1) UTCMES・駒場博物館「オマーン展」ギャラリートーク最終回として写真家佐藤美子さま、(2) トルコの大統領選挙分析を行った間寧さま、(3) 駒場博物館にて西アフリカのイスラームの展示を予定している池邊智基さまによる講演を開催しました。

(1) 2023年6月3日(土) 第四回 UTCMES・駒場博物館「オマーン展」ギャラリートーク報告書

『中東の馬にレンズを向けて』 佐藤 美子(写真家)

第四回ギャラリートークでは、前回のギャラリートークに引き続き、写真家の佐藤美子氏が「中東の馬にレンズを向けて」と題して、サウジアラビア、ヨルダン、トルコの3カ国で撮影した写真を映しながら、上記3カ国の馬事文化に関する講演を行った。

始めに、サウジアラビアの首都リヤドにおける祭典に参加した体験について、馬術の披露や馬と騎手との交流の風景を撮影した写真を示しながら語られた。人と馬との間で結ばれた強い信頼関係を示す一例として、寝そべる馬に騎手が寄り添う写真を提示した際に、司会の鈴木啓之氏は、オマーンと同じく、この地域の馬は人間を深く信頼しているように見えると述べた。この祭典に関する説明に続いて、佐藤氏は、馬の飼育所であるとともに、伝統的なサウジアラビアの馬の装束や馬具が展示されているリヤド南部のアラブ馬センターでの体験を語った。サウジアラビアにおいて、それぞれの王族が馬を個人的に所有しているという佐藤氏の話を受けて、鈴木氏は、馬を所有すること自体が家格を示す側面を持っているのではないかとコメントし、佐藤氏もこのコメントに首肯して、一般に普及し

ているラクダよりも馬の所有の方が地位の高さを示すシンボルになっていると考察した。

次に、佐藤氏は、サウジアラビアの隣国ヨルダンでの体験に話を移し、愛馬家として活動するヨルダン王国のアーリヤ王女との面談や王立厩舎での体験、そして観光地のペトラ遺跡で観光客を運ぶ馬などについて語った。ここで、騎兵が乗るアラブ馬を描いた王立厩舎の壁画の写真を見て、鈴木氏は、オスマン帝国からの独立を目指した20世紀初頭のアラブ大反乱で騎兵が活躍したことを想起したとコメントした。佐藤氏は、この厩舎の来歴と併せて、王家が純血のアラブ馬の飼育に力を入れている状況を説明した。佐藤氏によれば、牡馬が比較的に重視される傾向の日本と異なり、ヨルダンの場合、飼育される馬は牝馬の血統が重視されているという。ペトラ遺跡において観光客の移動手段として使役される馬に関する説明では、遺跡や馬の写真を映しながら、観光客の増加に伴って馬の酷使が動物愛護団体から問題視されている状況が言及されたように、人と馬との関係における負の側面が示された。

ヨルダンに続き、佐藤氏は、トルコのプリンスイズ諸島での馬事に話題を移し、現地住民によって馬車が使用されている様子を写した写真とともに、島内の馬が住民の生活と深く結びついていた状況を説明した。ペトラ遺跡と異なり、プリンスイズ諸島では、観光客のためだけに馬車が使用されているわけではなく、長年にわたって、自動車やバスに代わる交通手段として、また飲料水のような商品を運ぶ運送手段として現地の住民によって用いられていたという。この島で住民が自家用車ならぬ自家用馬車を所有している状況を見て、プリンスイズ諸島が特殊な地域であると再確認したと佐藤氏は語った。他方で、島内の馬が酷使されている状況を現地の獣医師が問題視し、公共交通網の整備を望んでいた話が紹介された。その後馬の感染症が蔓延

し、当局による馬車使用の禁止を背景に、現在では、島内において馬車が走る光景が過去のものになったことが語られた。

最後の質疑応答では、司会の鈴木氏から、「他地域と比較した場合、中東の馬事文化の特徴は何か」という質問がなされた。この質問を受け、佐藤氏は、中東の馬事文化の特徴を、紀元前から続く歴史の深さ、また人間と馬との信頼関係の深さに求めた。この応答に続き、聴衆から、まず「中東の馬術のルーツは西洋にあるのか」という質問があり、これに対し、佐藤氏の知る限り、アラブ馬の体質的特性に基づく長距離耐久走は別として、障害物を飛び越える競走は西洋起源のものであったと返答した。また、「母系血統の馬が重視されている状況はヨルダンだけなのか」という質問に対し、佐藤氏は、アラブ全体の傾向であり、この地域の人々は贈り物として牝馬を贈るように、牝馬を重視していることを語った。この質問に続いて、「サウジアラビア、ヨルダン、トルコの3カ国における馬の扱い方や種類はどれほど異なるのか」という質問があり、これに対し、佐藤氏は、サウジアラビアとヨルダンの馬を比較した時に、血統の違いによって体格的な差異があることを説明するとともに、ヨルダンにおいては、愛馬家のアーリヤ王女の意思が国内での馬の扱いに大きな影響を与えていることを語った。(伊藤匠平・東京大学総合文化研究科博士課程)

(2) 2023年6月6日(火) 『エルドアン耐震力と動員力：トルコ選挙分析』 間寧(アジア経済研究所・主任研究員)

5月14日、トルコにおいて議会選挙と大統領選挙が行われた。議会では、エルドアンが党首を務める公正発展党(AK Party)の選挙連合が過半数を獲得したが、大統領選においては、どの候補者も所定の得票率に達しなかったため、最も得票率が高かった2名の候補者による決選投票が実施される運びとなった。2

週間後に行われた決選投票では、接戦の末、エルドアンが過半数の国民によって再任された。

この選挙が注目を浴びた最大の理由は、エルドアンが初めて劣勢の状態選挙に臨んだということであったと間は指摘する。劣勢にも拘わらず、最終的にエルドアンが勝利したという結果を鑑みると、2つの可能性が浮上する。1つ目は、勝利がエルドアン政権の強靱さによるものであるということである。2つ目は、世論調査を欺く何らかの仕掛けがあった可能性である。本講演会は、選挙の結果を踏まえ、トルコにおける選挙の平等性について考慮しつつ、エルドアン政権がどのような方法を用いて劣勢を挽回したのかを明らかにし、20年を超える長期政権の選挙力学について分析するものである。

まず、選挙結果からはトルコにおいて国民の意見が真二つに割れていることがわかると間は指摘する。得票率が拮抗したにも拘わらずエルドアンと与党が勝利した要因として間は次の2点を論じた。一点目に、与野党の選挙連合でのイデオロギー的なまとまりである。第一回と第二回をみると、議会選挙での政党レベルでの選挙連合と大統領選挙の得票に差があるのがわかる。野党の選挙連合は、左派、宗教政党、ナショナリストとイデオロギーでは、統一ができていないが、打倒エルドアン政権という目標の下で一つになっていた。選挙直前に野党第二党が一時的に連合から離脱したことも得票率の低下に影響をしたとも言われている。その一方で、与党は保守政党、宗教政党、ナショナリスト政党という右派で連合を組んでいたが、選挙直前に連合に加わった政党もいたことから、政策面での一致はなかった。

二点目に、野党側が選挙での勝利に対して楽観的になっていたということである。世論調査結果を受け、勝利するための戦略の違いは、与野党での候補者の立て方に見られた。エルドアンは負けるリスクを減らす方向に舵を切り、重要な県の候補者リストのトップにウクライナからの穀物輸送やロシアとの調停交渉で活

躍したアカル国防大臣などの前内閣の大蔵大臣を擁立した。国会議員になれば大臣にはなることはできないというリスクはあるが、大臣経験者を立てることによって選挙で負けるリスクは大きく減らすことができた。他方、野党は世論調査結果や経済状況から勝利できると踏んでいたため、重要な国会議員を候補に立てなかった。重要な国会議員候補が選挙に出なかったという点で与党に大きく遅れを取っていたのである。加えて、大統領候補についても世論調査では、最も人気が高かったクルチダルオールが出馬した。最も人気が高かったイスタンブール市長のイマムオールには有罪判決が下されており、刑が確定すれば大統領になれないというリスクがあった。また、二番目に人気があったアンカラのヤヴァシュ市長は、右派政党の出身であり、クルド系の国民からの人気が高かった。

次に、エルドアンの支持が全国的にどの程度減ったのかについて、今回の選挙と前回の選挙の間の得票率減少と県別経済状態を图示して分析した。県別に見た場合、経済が悪い県ほど、エルドアンの支持が減るという関係性が示されている。過去の選挙と異なるのは、選挙前に地震があったということである。しかし、地震があったほとんどの県では、得票率減少は全国平均以下にとどまった。まだ今後の分析が必要だが、被災地の有権者がエルドアンによる将来の復興の約束に目を向けた可能性や、投票所における混乱や近隣県への移動が影響した可能性がある。

それでは、エルドアンへの支持の低下と野党の優位を報告した世論調査は誤りであったのか。間は、エルドアンの巻き返しは長期的なトレンドであったと指摘する。1月の段階で与野党の差は3ポイントの差になり、選挙1ヶ月前では2ポイント差に縮まっていた。これは、エルドアンの動員力を示すものである。与党としては、自らに投票したくないが、世俗主義的な野党が主導する連合にも投票したくない人や、投票に行かない人を自らに投票するように動員する必要がある。そのために与党側は巧妙な戦略を

取っていた。たとえば、選挙の前には、動画のモンタージュを流した。クルチダルオールが選挙演説をしている動画のあとに、クルド系のテロ組織であるPKKの軍事部門の指導者が手を叩くという動画をくっつけるというものである。トルコでは、多くのメディアが政府によって買収されているため、この動画は後に国営放送などで全国放送された。

また、トルコでは選挙の平等性にもしばしば疑問が呈されている。野党は選挙の監視を強めると言ったが、組織力の差によって多くても8割程度しかできていない。治安が不安定な地域や与党が強い地域は監視が不十分であった。議会選挙の開票時には、アナドル通信社が高等選挙委員会の公式発表に先んじて、正式な値ではないが、与党がある程度強い地域から得票率の数値を報道した。そうした情報は、開票を監視している野党側の人が勝利を諦めて、帰宅してしまうことにつながった。

講演内容を踏まえて多くの質問があった。たとえば、経済危機や地震の影響を受けて有権者が野党に投票をしないように与党がイデオロギーに訴えた投票行動を促していたことや、エルドアンの後継者問題について議論がなされた。(関颯太・神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

(3) 2023年7月15日(土)

『セネガルの宗教運動バイファルによる托鉢とウォロフ語の説教』

池邊 智基 (日本学術振興会 PD)

サバンナにも劣らない猛暑の中、『セネガルの宗教運動バイファル』(明石書店、2023)の著者、池邊智基氏の講演が行われた。セネガルの生活や政治経済に大きな影響を与えているスーフィー教団「ムリッド教団」の宗教実践運動バイファルについて、現地語の聞き取りや参与観察など文化人類学的手法から研究した成果を発表した。

西アフリカに位置するセネガルは国民の9割がイスラーム教を信仰しているが、ほぼ全員がなんらかのスーフィー教

団に所属している。池邊氏が調査対象としたムリッド教団は1880年代にアフマド・バンバが創始したセネガル生まれのスーフィー教団であり、その内部には「バイファル」と呼ばれる宗教実践者集団がいる。バイファルとは、開祖バンバとその弟子イブラ・ファルの師弟関係を模した導師と信徒の一対一の関係であり、導師の命令に対する信徒の奉仕を重視する。バイファルは特定の職業につかず指定関係の中で質素な宗教生活を送り、ズィクル（朗誦）や無償の労働、托鉢や祭の運営全般の作業などに日々従事する。

バイファルたちは太いドレッドヘアやパッチワークの服など、開祖の弟子イブラ・ファルのものと伝えられる格好に自らの容姿を似せている。しかし外面だけではなく内面を重視するのがバイファルの特徴であり、礼拝や断食のような行為の形式性には囚われない。実のところイブラ・ファル本人の著作には、礼拝や断食も奉仕と同等に重要視すると書かれているが、この著作は流通量がそもそも少なく、あまりバイファルたちに読まれていない。格好を真似るほどイブラ・ファルを崇敬しているにもかかわらず、本人の書き残したことばよりも口で伝えられてきた伝承を重視するのである。

ムリッド教団については、植民地行政との協力やセネガルの安定した国家政治との関係性について研究が多く発表されてきたが、池邊氏は日々の宗教実践に着目した。セネガル国民の9割以上が話せる共通語、ウォロフ語を用いて聞き取り調査を行い、特定のバイファル集団に密着して参与観察を行い、信仰告白も正式な契約もしていないのにバイファルの一員扱いされるまでになったそうだ。

バイファルが行う導師への奉仕として印象的なのが托鉢である。托鉢はアディヤ（導師へ金品を渡す慣習的行為）を目的とする修行だが、ムスリムの五行の一つである喜捨とは区別され、集まった金品は冠婚葬祭や構成員の治療費、村落部のクルアーン学校建設や農地耕作への援助など、倫理的・宗教的な文脈でのみ消費される。池邊氏のフィールドワークで

は、都市路上の托鉢は通行人からほとんど素通りされていたが、現代はSNSや送金サービスを駆使して知り合いや組織内ネットワークを駆使して金品を集めているそうである。池邊氏によれば、アディヤを通じて「一般信徒はいわば搾取され続けることが労働」であり、高頻度で行われる祭礼のためバイファルたちは常にアディヤを必要としている。

ムリッド教団は祭礼が多い。祭礼や集会のたび導師はワフターン（説教）を行い、バイファルたちは導師のカッドゥ（言葉）を重視する。池邊氏はこの時の「言葉」に着目し、無文字社会のアフリカで、オーラルな知の伝達が行われていた可能性を指摘している。

祭礼や集会でワフターン（説教）が行われる様子を見てみると、マイクを通じて人々に声を届けているのは導師自身ではなく、「伝達役」であることに気づく。「伝達役」は導師の発言を間接引用して人々に聞かせる権威化の技法で、西アフリカに広く見られる。大抵は導師の発言をそのままおうむ返しにするが、「導師がこのようにおっしゃっている」という構文をとる以上人称などに調節が入る。まれに、導師は何も語っておらず「伝達役」が勝手に説教している場面にも遭遇するそうだが、その場合も言葉を紡いでいるのは導師だという設定になり、発言を権威づけオーラルに伝達される言葉に重きを置いていることがわかる。

また、ワフターン（説教）では豊かに伝承を用いていることが知られている。ワフターンの際、導師たちは過去のあらゆる出来事をその場その場の文脈に沿って引き出し、引用しながら言葉を紡ぐが、その引用は断片的で、その場のコンテキストにつなぎ合わせることができる箇所を伝承の中から取り出しているそうだ。池邊氏が注目するのはワフターンの「いまここ」性であり、説教の内容を補強するために「いまここ」に先立って存在するあらゆる事象の伝承を引用することが可能となる。一見すると無関係な伝承を引き合いに出しているようにも思えるが、伝承の断片からワフターンの主題との間に連続性や類似性を見出して、伝

承という過去とワフターンという「いまここ」を論理的に結合し、宗教実践の理由づけを組み立てているのだ。

セネガルの生活や発想は、同じムスリムを研究対象にしている中東地域を扱う研究者からも驚きの声が上がった。もちろん日本でもほとんど知られておらず、池邊氏の著作や本講演は貴重な機会となった。

池邊氏は今後の研究で、バイファルの食文化を観察するだけでなく、話し言葉であるウォロフ語を文字化しインターネット空間で伝承を引用する現象についてオーラルな引用との関わりかたを検討していくという。言語の文字化にインターネットとSNSが関わる例は非常に希少であり、研究の発展が待たれる。（橋本藍・東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科アジア・日本研究コース3年）

5. バフワーン文庫便り

バフワーン文庫特任研究員 倉澤 理

2017年の設立準備開始から6年。バフワーン文庫はご寄贈いただいた書籍も含めると、所蔵冊数4000冊に迫る図書室となりました(2023年7月時点)。

アラビア語、ペルシア語、トルコ語など、中東地域の現地語書籍に加え、研究文献としての欧語書籍、和書を積極的に蒐集し、バリエーションに富んだラインナップとなっているはずです。

蒐集の選書、登録作業、配架作業を担う私自身は、主にアラビア語文献の古典研究(イスラーム神学)をフィールドとしています。文庫に所蔵する書籍に関しては、古典期・近現代問わず、現地語書籍・研究文献を蒐集して参りました。

今回、このニュースレターの原稿を依頼されるにあたり、私自身の専門外の書籍をご案内させていただくことにしました。

昨今の「入管法」改正の議論が急速にクローズアップされている在日クルド人に関する書籍です。

○お隣りのイスラーム：日本に暮らすムスリムに会いに行く／森まゆみ著

(289頁、紀伊國屋書店、2018.2)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ(2023年7月時点)

日本在住のムスリムへのインタビュー集。うち1章が埼玉県南部に居住するクルド人男性とその家族に割かれています。

○クルド人を知るための55章／山口昭彦編著

(338頁、明石書店、2019.4 第2刷)

※東京大学での所蔵は本郷の総合図書館、駒場図書館、バフワーン文庫、柏図書館(2023年7月時点)

第49章：在日クルド人コミュニティ黎明期の「ワラビスタン」と、第1世代(中島由佳利著)収録。

90年代初頭に日本でコミュニティを形成し始めた「第1世代」の来歴や文化活動の推移などに関して概括的に記述されています。

○日本で生きるクルド人／鶴(とき)沢哲雄著
(207頁、ぶなのもり、2019.8)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ(2023年7月時点)

第1章：日本にやってきたクルド人
第2章：クルド人を追い詰める「収容」
第3章：困難に耐えながら
第4章：地域に根付くクルド人

在日クルド人の現状を、様々な出自のクルド人やその関係者らへの取材を通じて浮彫りにしています。

古典研究に身を置く私は、昨今の出来事・事柄につきましても、初歩的な知識しか持ち合わせていません。また、図書室という公に開かれた空間で業務にあたる身としては、文庫を様々な方にご利用いただくためにも、自身の立ち位置が色々な意味で中立的なものであるように心掛けています。

一方で、「入管法」改正の議論に端を発した在日クルド人コミュニティをめぐる様々な言説は、中東にコミットしている者として、何かせずにはいられないような切迫感を私に感じさせてもいます。

バフワーン文庫が所蔵する図書が、学術的な研究のみならず、現実における様々な事柄にも寄与することができればと考えています。

6. センターの活動紹介

オマーン・スルタン国への出張

2023年3月10日(金)から17日(金)にかけて、UTCMES ではオマーン・スルタン国への出張を行いました。本学大学院総合文化研究科の森山工研究科長(当時)によるラフマ・マフルーキー高等教育相への表敬訪問では、カブース講座を通じた本学の研究・教育活動への支援に感謝が述べられ、マフルーキー大臣からは研究・教育分野での交流がさらに発展することへの期待が述べられました。



● UTCMES スタッフ紹介 (2023年9月30日現在)

〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)
荻谷 康太 (兼務准教授)
鈴木 啓之 (特任准教授)
倉澤 理 (パフワーン文庫・特任研究員)

大塚 修 (兼務准教授)
森元 誠二 (客員教授)
木村 風雅 (特任助教)
瀬口 美加 (事務補佐員)

〈UTCMES 運営委員〉

高橋 英海 (委員長、総合文化研究科教授)
荻谷 康太 (総合文化研究科准教授)
四本 裕子 (総合文化研究科教授)
菊地 達也 (人文社会系研究科教授)

大塚 修 (総合文化研究科准教授)
清水 晶子 (総合文化研究科教授・副研究科長)
黛 秋津 (総合文化研究科教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東寄付講座運営委員会〉

高橋 英海 (委員長) 大塚 修 荻谷 康太 橋川 健竜
清水 晶子 四本 裕子 黛 秋津

● 発行者情報 UTCMES ニュースレター VOL.23 2023年9月30日発行

発行: 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター(スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL: 03-5465-7724 FAX: 03-5454-6441
<https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

編集: 木村風雅

印刷: 株式会社コムラ 〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぷりんとびあ3 TEL: 058-229-5858 FAX: 058-229-6001